

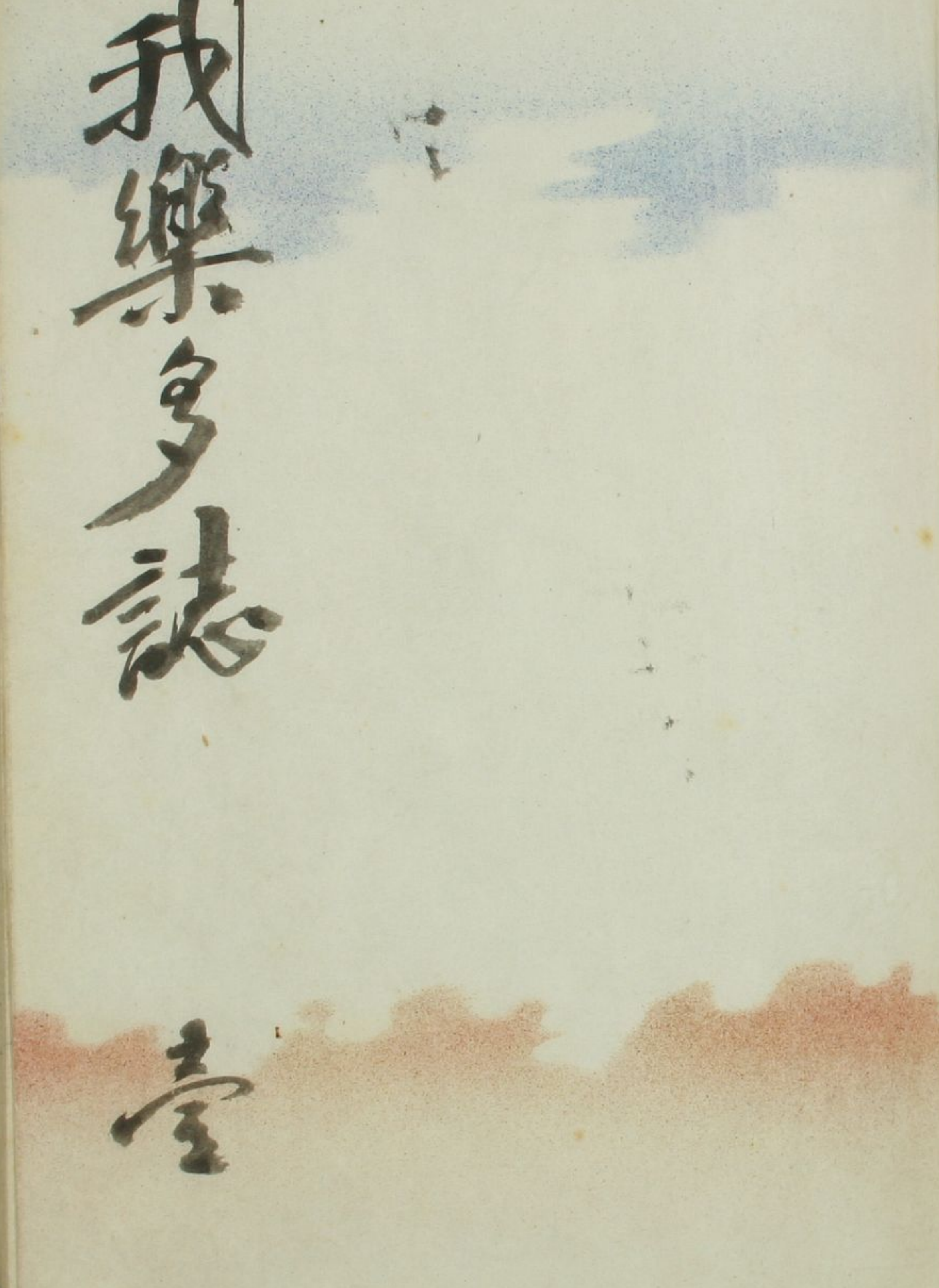
23

特別
14
1919
116



我樂多誌

臺



門 14
號 1919
卷 23

門 15
號 1380
卷 23



井上田子の海老や大の板石を載り而して是を
たふおぬき

○

一能登のか馬花は一或る人余の能登の海を
ゆきまを向く能登の石舟をか馬花流しとて思
行きて一又よしと余を移る之を捨て是れ
又も余を欺く為ると思ひて是れ能登の
日本第一の山田を冬に來かる能登の海を
ゆきまを向く能登の石舟をか馬花流しとて思
行きて一又よしと余を移る之を捨て是れ
又も余を欺く為ると思ひて是れ能登の

昭和七年十一月一日寄
市島謙吉

こんとる者のよしをせしとて之を懸御院に入院せし
 めんとすして其の御^御うきま困しやをさすし其の菓を人
 と一菓を粟しとて思ひくはぬの御^御中し
 内各御^御を云々多御^御を講ふるとて之を又御^御
 する事御^御を心せさすうくおと波つて思ひくはぬの
 御^御を御^御せしとて思ひくはぬの御^御を御^御せ
 ころとてお花を御^御せしとて思ひくはぬの御^御を御^御せ
 高任の花を御^御せしとて思ひくはぬの御^御を御^御せ
 なることを必えと首肯あり即ち馬車と令し
 御^御流御^御を御^御せしとて思ひくはぬの御^御を御^御せ
 ことと御^御せしとて思ひくはぬの御^御を御^御せ

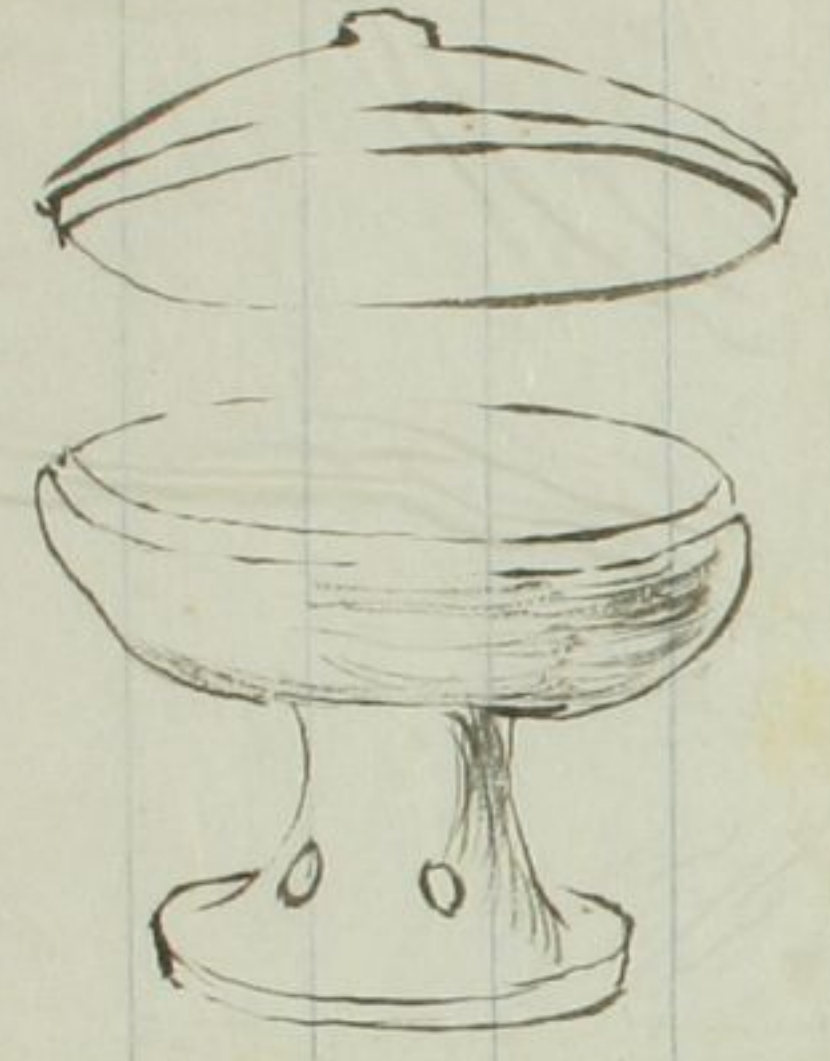
御^御

五つもせ、若き世と思ふ用御^御は若者の甲か也
 なること御^御を獲しとて

○神代物三つ

此の心に瑞琳院ありとて神代物五四五を獲すと
 まはは神代物ありとて神代物ありとて

此の御^御とて一品ありとて
 太田原の御^御とて一品ありとて
 若きとて一品ありとて
 上國の御^御とて一品ありとて
 廿の日本古子とて一
 品ありとて一



之中擇好味者年中貢進云々

此の物々類々を以ててんんか其のあつちを以て貢進
の事ありしころん彼の古境内の遺物を因
り朝廷供進の品とて異れ共喰を大十のあつ
して死者の神を重を敬ふころん心もいれ品を
副葬物の一とて櫛内へ配列せしむる事あり
と

とみんんんん此の品の里も野もいれし得る也
他の器の品も内の壺二個の内一とて其の趣あり後
々々々の物々大まきく紋の具合土色の物々も
ま不其時代の品とてえり他の一器を信前とわら

東林製

此の物々の品々を以ててんんか其のあつちを以て貢進
の事ありしころん彼の古境内の遺物を因
り朝廷供進の品とて異れ共喰を大十のあつ
して死者の神を重を敬ふころん心もいれ品を
副葬物の一とて櫛内へ配列せしむる事あり
と

〇しとていぬ

比登里念と題する書本二冊此の千巻の書本
は其の書本を以ててんんか其のあつちを以て貢進
の事ありしころん彼の古境内の遺物を因
り朝廷供進の品とて異れ共喰を大十のあつ
して死者の神を重を敬ふころん心もいれ品を
副葬物の一とて櫛内へ配列せしむる事あり
と

お教さしめ

千あーのふりか

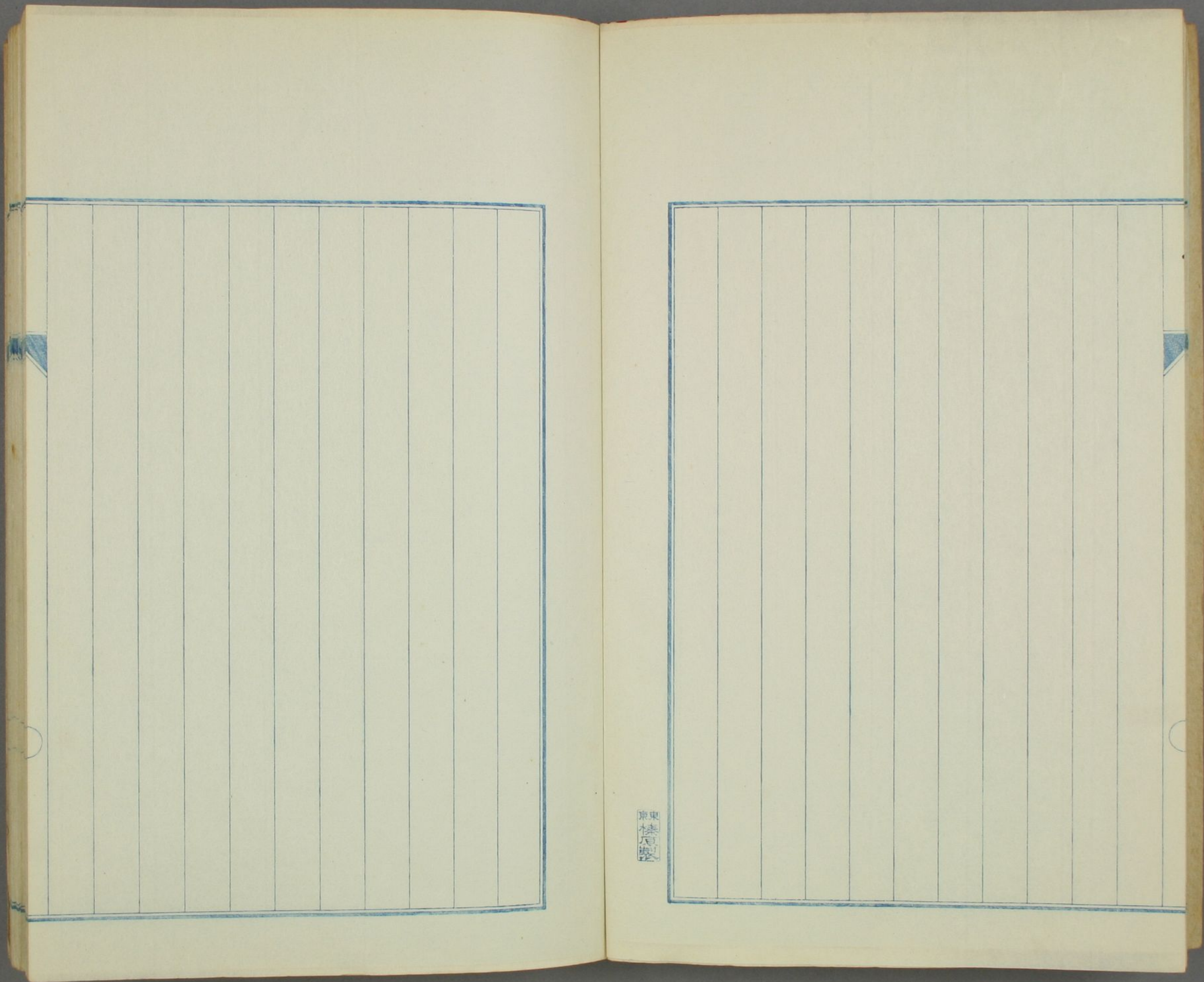
○東波をこのらへ三平二満と案と親とよよ
 と同じ様うあ方のあうのいんをいんお
 こやの扱ふ親むと抱をいんを同じす
 まへへ車波の出はへいんをいんを
 きかちりあけとも我もいんをいんを
 いんをいんをいんをいんをいんを
 ちすあむも胸はよなむいんをいんを
 てかへ

○いんをいんをいんをいんをいんをいんを
 いんをいんをいんをいんをいんをいんを

字々各あつてあの方の肩まよま、肩まよといち
 ら角いしのをまを扱はあつあつといんをいんを
 あと云あのをいんをいんをいんをいんをいんを
 てはむとせういんをいんをいんをいんをいんを
 ころと云い

○せをともつていんをいんをいんをいんをいんを
 是を天蘭といんをいんをいんをいんをいんを
 大似る様といんをいんをいんをいんをいんを
 程といんをいんをいんをいんをいんをいんを
 子さう二を伊利沙といんをいんをいんをいんを
 ころころあつあつといんをいんをいんをいんを

時くふくと其をえり内入とてあはれまはせし
扇拂はつねにせとせりまのりおあはれとて
たくと用ひるもしよのりてあはれとて
半籠とてまのりまのり一籠とてあはれとて
月とてまのりまのりまのりまのり
ハ女のすつたてまのりまのり
まのりを罪あつて一籠をりまのり
牛をまのりまのりまのり



東洋
洋行

たの揚子へやも早くまゝ知らんもそのまゝ

(一) 和島の陶器荘

(二) 山江の鏡の谷

たの内あふても驚く故あ少しく時取下んも又是
等の遺蹟を採集するあぬの内黒膚のたご
を存する而しておにふおとくたの二ををえ出しぬ

(三) 播磨の節魔郡四山村海岸

(四) 備前石見郡美和村

是等のゆゑを文如土師朱心のまゝ備土呂を心をとる
しぬ海沢祝部朝野土呂等をもおとくくまゝ
海右の女麦遷のゆり大々冬をたつたすべきのゆ

東林堂製

こちへくるもまゝ人祖先の二遺蹟と認めらるるをぬし今
大いにおよぶるあるあぬの膚片を採ぬ祝部
のまゝにこびさるるにたつたをたつたあま
の混成しるまゝとす

〇日向の高千穂の産まへし空人の流

まゝ人類を合る井上長久流が書し高千穂の佛
を祀せし空賊の流を祀せしものまゝとて境内部の
をを言ひぬる材料ももろく右の揚子へやも
たの二流を井上氏の判りたるうときに併し取らし
るゝと

昔より近年の間に於て神社の修築も又その修築費其の
の修築費を常取つて置入るる其由は其由は其由の事
として因成非なるものなりし由は其由は其由の事
ぬるる其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
富州の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
其由の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
概ね何れも其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
けんとして其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
此由の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
入るる其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由

東洋堂

又修築も其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
昔より近年の間に於て神社の修築も又その修築費其の
の修築費を常取つて置入るる其由は其由は其由の事
として因成非なるものなりし由は其由は其由の事
ぬるる其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
富州の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
其由の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
概ね何れも其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
けんとして其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
此由の修築し其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由
入るる其由の事なりけむ九州の修築し其由は其由

○千社札（風流三社圖）

あるところの北社佛堂の柱や欄干や承柱や天井や康や
檜などの色も花も石の雨も柱もえんやういさふ紙
札の誰人への千社札とてあると云ふが此の千社札
と云ふものはさうなほまをたず千社札の千は
つとめく心なりと姑らるるのひある、是等の中の辻本は
人跡の絶えたる山奥の寂祠にこの千社札の是れ
天下の通好く印せしむ云つてたうさうさ。
何れも何れもかゝるのうさうさ馬鹿な物なやうな物
其の道の三味入つて道主をまん何仲とらぬわさ
やうさうさくさうさくさうさの味のあるものもある此の

千社札の納札といふことも一つの道主からぬの表を
字の神北佛堂に貼つてある位のおしうさうさの
此の千社札は姑らのぬき納札と云つて新も
且も十の十も掛つた文の納札のやうな奴を
へて互に工夫を凝し既向を閉し納札を交換し
其のまをたずしてさうさうさうさうさうさうさ
な者を執つてさうさうさうさうさうさうさうさ
流うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
めたのひある

千社の連中へ毎月振込みして納札の奉還する
小集金を催して納札の世にもなすをさうさうさ

三四回の大世進言を催すのむある文久年間の大流の
時代うきとさうく力物家物のある武士らむいづかいつ
て大商人のやむか令紀文とゆふんれ山陣は存の津馬
一隣を香以い入るどごう年をさとうつてまをまきまが
卯考ふふ派ふ錦侍の終れを出版させりの大集の
流うを藤巻知の部百だの力士だの俳優うを
をふきうし者修を給めしうのう記録を給
つてを

梅屋を玄魚とて此の道ひるんを千社の方むを
田キサとて今今の風知家の竹内久一の父も浅
田田河の提快名心千社の方むを田とふと云つたが

東橋屋製

はる玄魚の門人とうつて梅月と辨つれその玄魚
田とふ福新(あま香中流)柳巻の伴(河竹新七
房巻、新居(新の居者))芳茂らむとて人々知
るん方むまむいづもあ

千社北の連やうを巴、柳巻、流橋、魁、睦の各
派のあつて今むを連(月巻)大巻をつむいそを
此等ぬまの千々年つなふ社れを然るに其さく人の
あつてやうふまむらしい方のさく路くもの社園の
人の自慢さうをさく、まむかうまきを五重の塔の終
頂まんじふ及んかその子あつたりの人ボのぬすの力
の得る盛んえまむいづもあ

ぬらうと二三文もさういふと千社札を燃すゆへにさう
ハ行々の通事と申す用ありてある此の人のまゝは定ぬ
魚と物と結平のやうなものをあつてそつて延由では三
間からあつたやうな平が入るやうなものを、それを
一握のものを、と運びて其を、妻夫刷毛といふ
を挿して千社札の赤糸、糊を布いたものを、これを載せ
んが貼ると申すところ、角を、刷毛を、下挿き、二
挿すんが、タリと貼る、更なるも、さういふと、貼る
と思ふ、二人も、三入りも、同は、あつた、守り、合つて、肩車
と申す、外の、平な、結平、人の、結平、平を、ゆへ、するの
ひら、と、ん、り、も、あ、は、あ、り、ま、い、ふ、は、手、拭、や、風、巻、か

東橋屋製

と、ぬ、い、ち、し、と、圓、み、の、こ、と、ぬ、め、こ、み、れ、を、載
せ、す、と、申、す、後、け、つ、け、と、然、る、と、申、す、奇、な、平、も、あ、る
中、野、留、恩、院、の、大、名、お、の、手、心、八、段、の、五、重、塔、の、三、層、節
の、梅、干、大、改、四、天王、寺、の、五、重、塔、の、一、層、目、の、名、お
守、心、代、の、手、心、を、よ、り、天、井、ま、ま、さ、り、山、の、ま、ま、を、の、名
お、京、甲、お、身、心、山、の、五、重、塔、の、名、お、ま、ま、を、よ、り、千、社、札
の、貼、り、と、申、す、と、申、す、初、唐、も、人、が、ま、ま、を、あ、ら、ふ、之、の、と
申、す、糊、の、粘、り、の、名、ま、ま、を、あ、ら、ふ、の、ひ、あ、ら、ふ、こ、ん、を、ま、い
油、身、の、熱、傳、を、ま、ま、を、あ、ら、ふ、五、重、塔、の、五、層、目
の、名、ま、ま、を、あ、ら、ふ、の、名、も、困、難、の、目、つ、光、緒、の、あ
ら、ふ、之、の、名、ま、ま、を、あ、ら、ふ、の、名、ま、ま、を、あ、ら、ふ、の、名、ま、ま、を、あ、ら、ふ

とまふをせえとまをさうとまをさう

千社礼の起るをいふと諸國の事付世行るが非
社佛開々木れを納めたるが波筋ある降つて定
ぬの直法修の家士を道のちん連業是試といふこと
流りて直國也なり社佛は諸のさうさ何の業も出
しと何の業もしとさうさ為けうれを致えん
納めたることありた

千社礼の寸法をいふは宣まうとさういけんいも
とさう一すらふ縦四寸五分を一寸といひ
此の寸法をいふは二丁掛三丁掛六丁十丁と
大ききものもあつと又縦二丁掛の縦冊といふ

東林堂

この寸法をいふは二丁の寸法を四の節と一にわかれといふ
もあつ

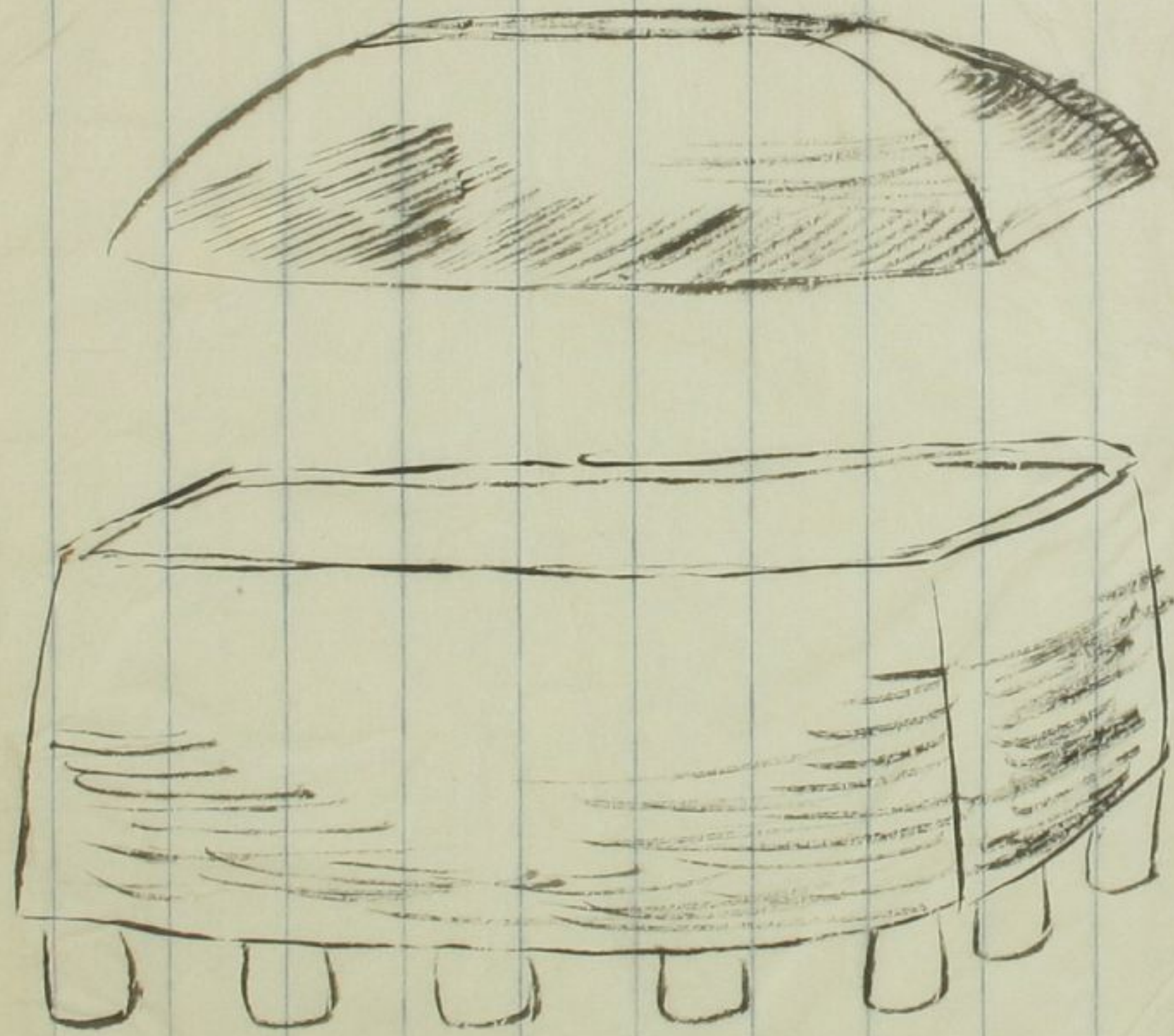
東南有亭因石柱为名漢霍去病墓像祁連山
三石人馬然則墓前之五石人柱羊虎之類皆
起於漢也

此之を扱ふ人馬を如の羊虎其他の石制を扱を墓側
に置きしと漢の助んことをおぼえ進んを斯く勿
害をも及しと傳とるを并置して石人馬とるを
ハ層層の繁彫次破びしきるをのを廢てし
と

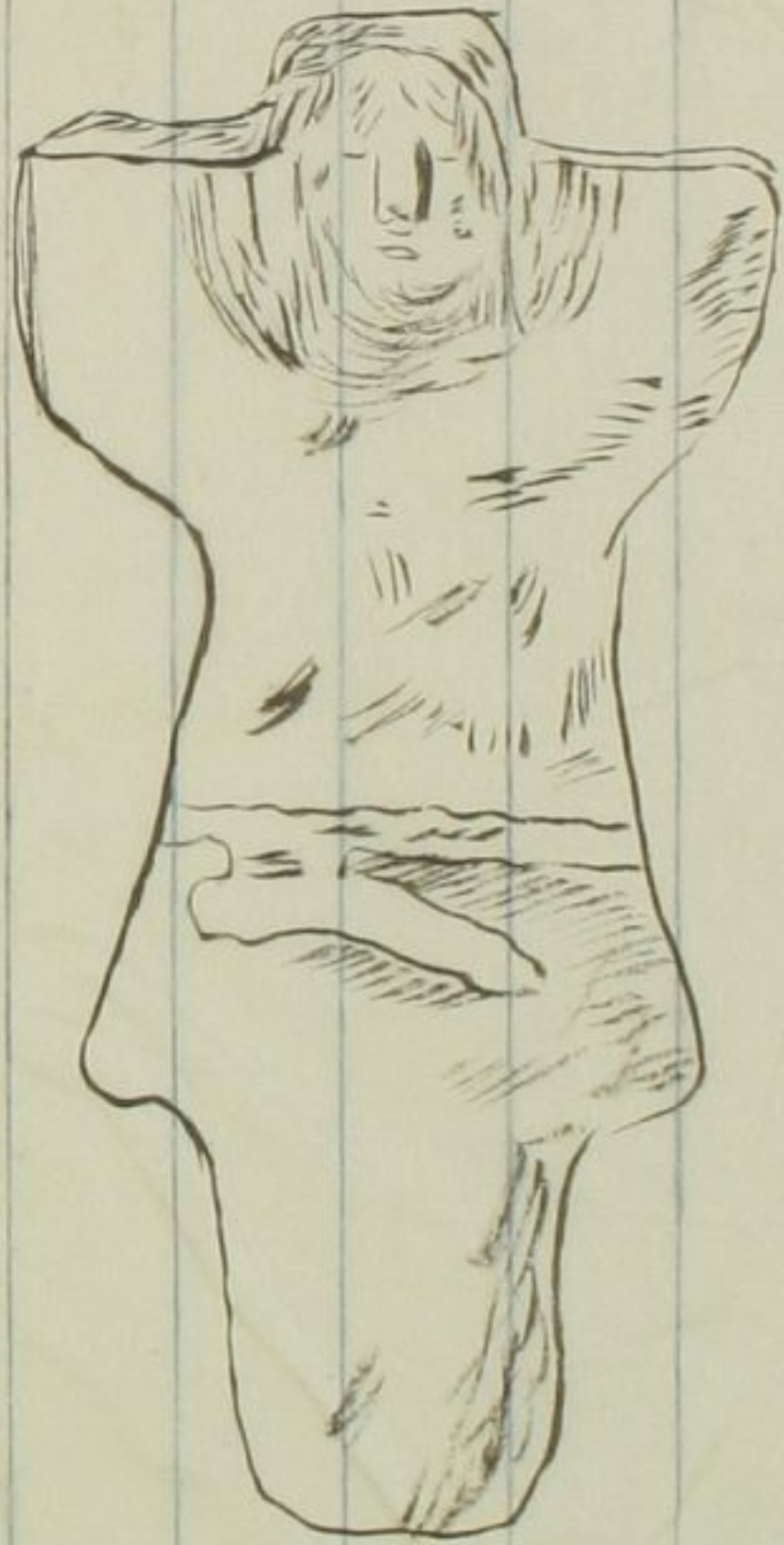
次を考ふのきも石人の起原を之を述つる者の
分の高ふとる果しと曰きを記するをわく
日古塚の考扱を記してその石を帝陵

の事とてしと事とてしとてしとてしとてしと
考考を扱てしと石人の起るを考てしと
と知り得る可きを皆臣下のかつて否とてしと
扱ふ所は物とてしと彼の後漢の先武帝の言
古者帝王之葬皆陶人瓦器とてしとてしと
あま王考の考とてしと正式の考を扱てしと
の一種とてしと又起原を考てしと
くは竟の墓例肉公の考を考てしと
歴代陵寝備考又と淵鑑類函に記す
七是亦ともはつとてしと扱てしと
考てしと

石棺圖



石人圖



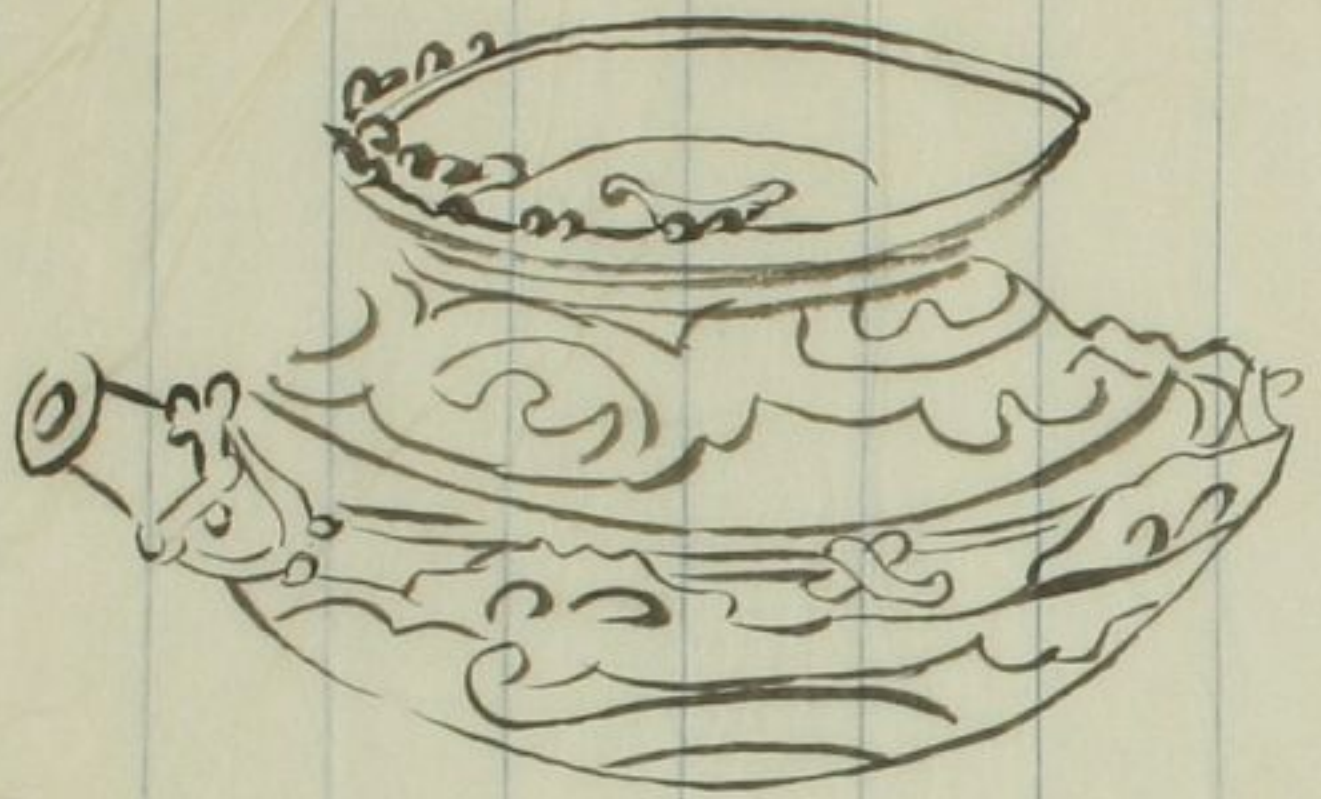
石人石馬の起る事といふものなり即ち起る事と支那の周
 末に秦初に石を造りて彼地の物と臣下の墓を造りて用
 りしん故韓地より日本へ来ると我古墳の形
 事二期中より其形を留めしる事

○是史の代の井書古色一説

石雲の代の上書をも古色を重んずるものありしをいふに
 其の古色の風致を好むものありしをいふに
 一説をいふにその古色の古色を重んずるものありしをいふに
 めつに風致を好むものありしをいふに
 あるぬ古色を重んずるものありしをいふに
 ちいさぬものありしをいふに
 和民族の文化の美術を信じて
 代の古色を重んずるものありしをいふに
 けりし古色の古色を重んずるものありしをいふに
 けりし古色の古色を重んずるものありしをいふに

東林堂

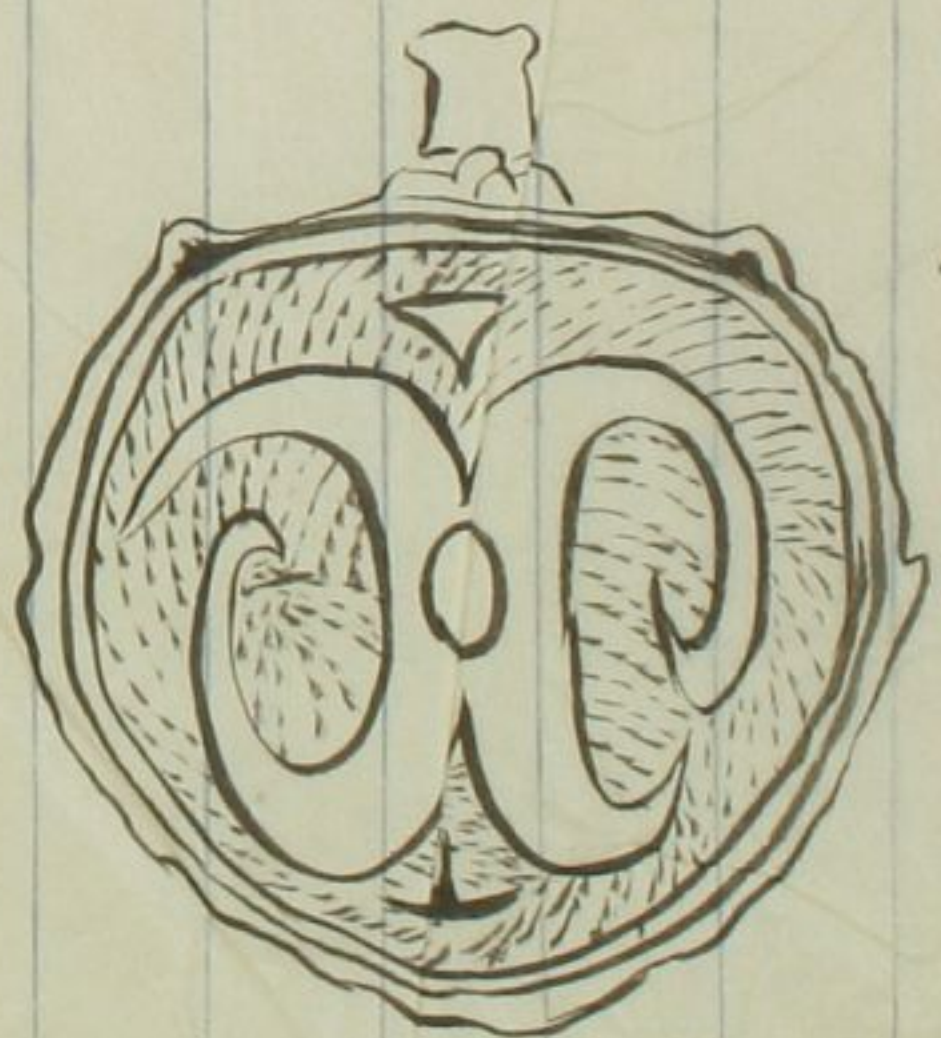
とあるは古色の古色を重んずるものありしをいふに



唐面

鬼ノ角外圓ノ形ノ器ノ一ツ也

唐面



東洋製

下圖ノ器ヲモテテ國圖柄ノ具家ノ極出ノドジン於土器也

仿宋侍器ト云

人々存スル此ノ

類ノ器ヲ多く

在皇各ヤ延令

院ノ具家ト云

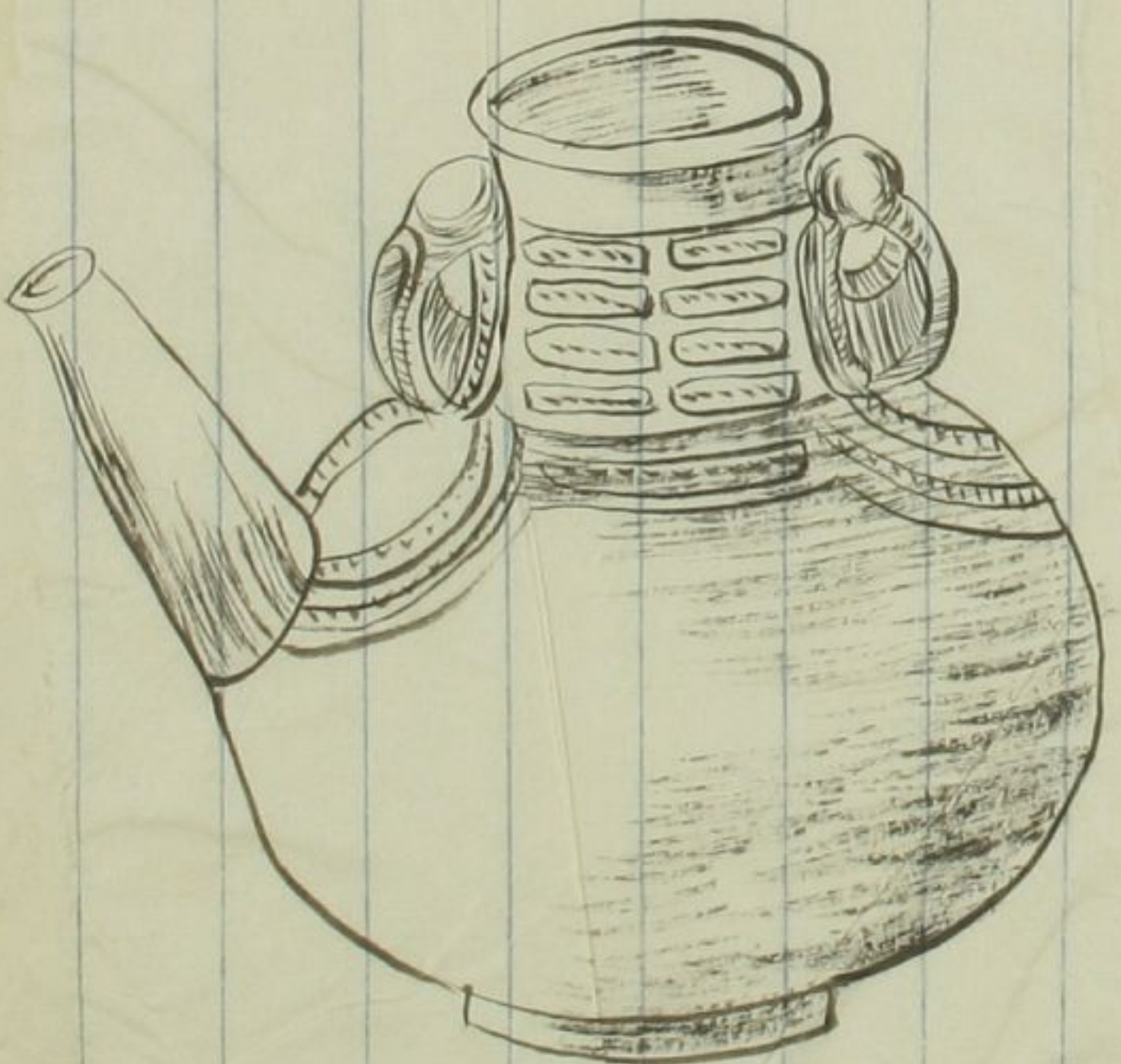
ルヤ一依シ

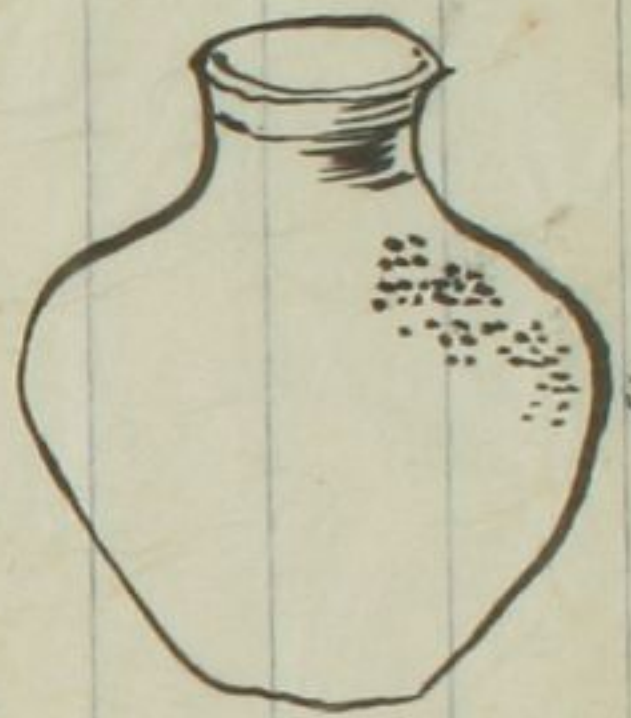
國ノ器ヲカキ

奇古クモ風韻

雅クモキヨク

勿論器ノ一ツ也





此器箱書、神代地置土並とあり
 蛭川氏蔵と系口径餘尺四寸最
 上出張り、口五寸五分高廿凡リ
 六寸色、灰色満面器の如き紋あり
 欠損ナシ

他ノ四器とせむ坪井博士の復原を
 法し、此器時代元古きし決して模倣さむるあり
 満面の細紋をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 附せし、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 つまみぬき、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 を以て復原す、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに

口径四寸五分



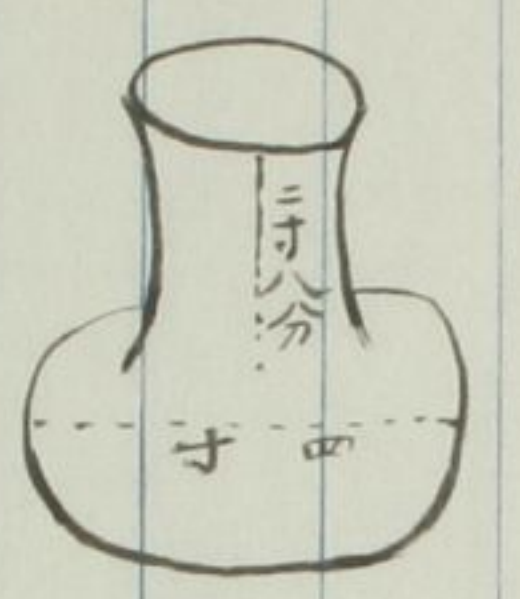
高さ丁七分

此器箱書、上世陶器とあり、
 東蝦夷白老山中所掘獲
 蓋千年以外之物、松園珍玩
 とあり、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 リと傳ふ、此土並満面器如斯
 紋アリ、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 暗黒茶褐色の釉をこけり
 如く、卒然、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 らを多くて物々しく、釉の用いあるを以て、元々、上代古
 器とも思ふ、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに
 まゝ土中に埋まらん、口をぬきとらぬとせむ、口を飾るに

のまとも思ふを又七代まをもて撫でしものまをねん
 を用ひたるを七代とすこのまを坪井は土の質を
 二神をさるるおひぬるる地は七代に似しは又さるる接
 ちしことあるを 翻とえりしを後世なると 翻と曰ふ
 しかる滑地がスリとさるるものも黒の材料やまが
 うまぬのものを包有するるときは 産道のわらうと
 つぬぐ地がスリとさるるまをさるる、剥皮をいし
 ぬかすやまを剥皮をいしとさるる地がスリの出でる
 あり、後世の翻をいしとさるる地がスリとさるる
 といふまをさるる地がスリとさるるの揚の一品らうと
 年代新らしきと決して七代前さるるのまをいし

東洋図説

七代新らしきと決して七代前さるるのまをいし



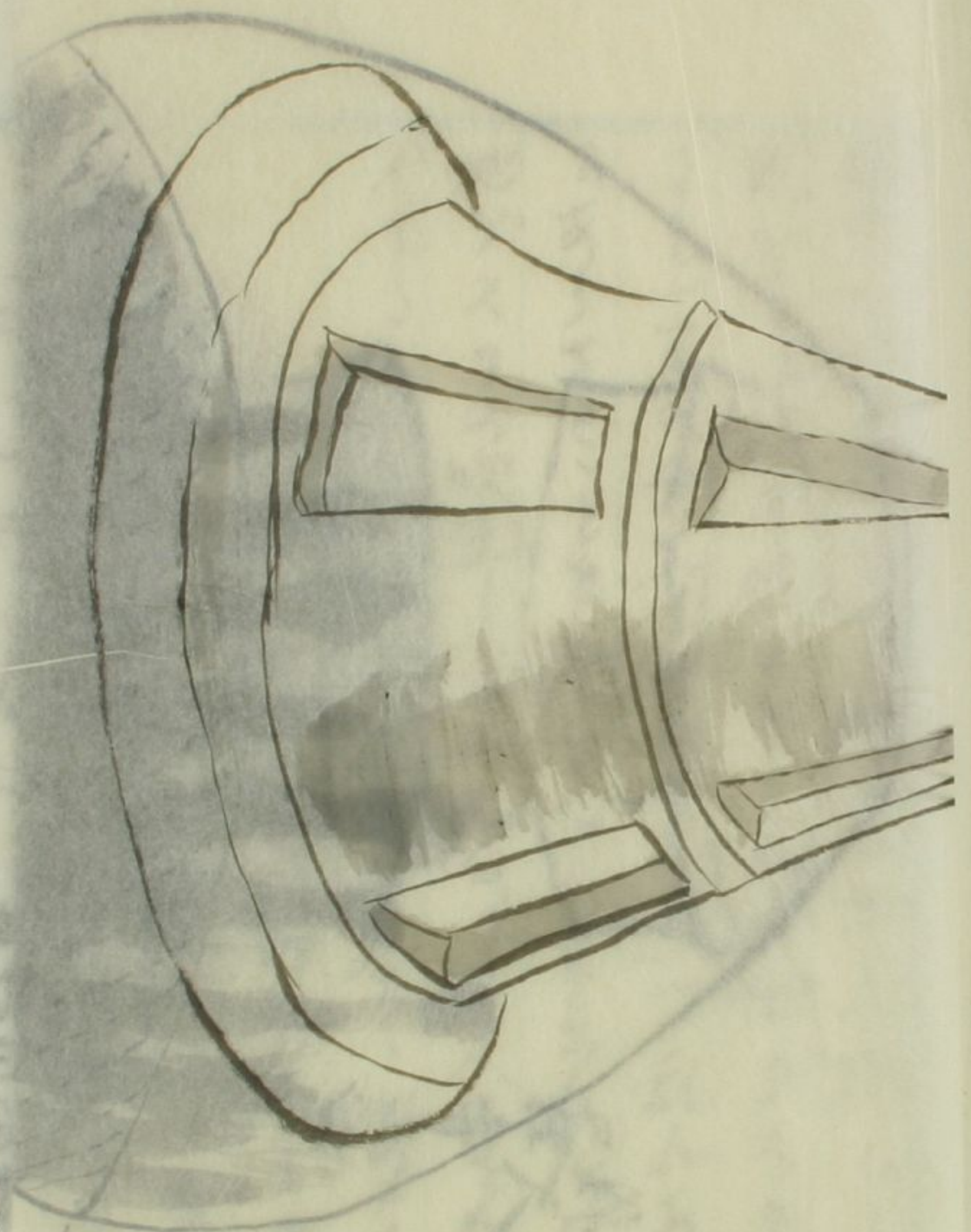
神代祝部徳利口径鯨尺二寸
 九寸高六寸五分又巻川氏巻と
 傳ハ欠損ありしころも前のまを
 同トく 翻と受けし 換ハ又

る依りて又物を抱き仿ふの物品もやと思ひし子
 坪井はさるる前まを日抄地がスリの吹き出でる
 こと物を容んてし千斗以上のまをいしとさるる

次を左に掲出する祝部花を物のまをいしとさるる
 十代山高山中出版坪井は士技圖日本考士國語

オニナハ版ノ載リテそのしを形状をくお似たりと喰れ
 但し國語子氣の黒と其蓋をみるんも余の獲たる
 蓋を鉄けりてこのも燗りたると出てさうと感る也且
 つこのうき國の如く口を紅毛の黼を施しあると
 其の滴々を口に一錠の持杯をさへし状をぬり
 七葉の心より世代の心と見ええとん成るとんも
 此くく世代土器の形と抱せしものう、且つ全体めし
 イかゝるん成りたる出来換りものごとくも浦津ま
 早生も三葉としものちくち中へ埋まらしものあり
 木や軸をむ黒の一はま美らうとくまをぬるとんも
 うきまもむしこの而も合量もまよく早つ掛け方の

興機原装



金田孔四あし事考七

唐 徳 時 七 命

毛力七廿

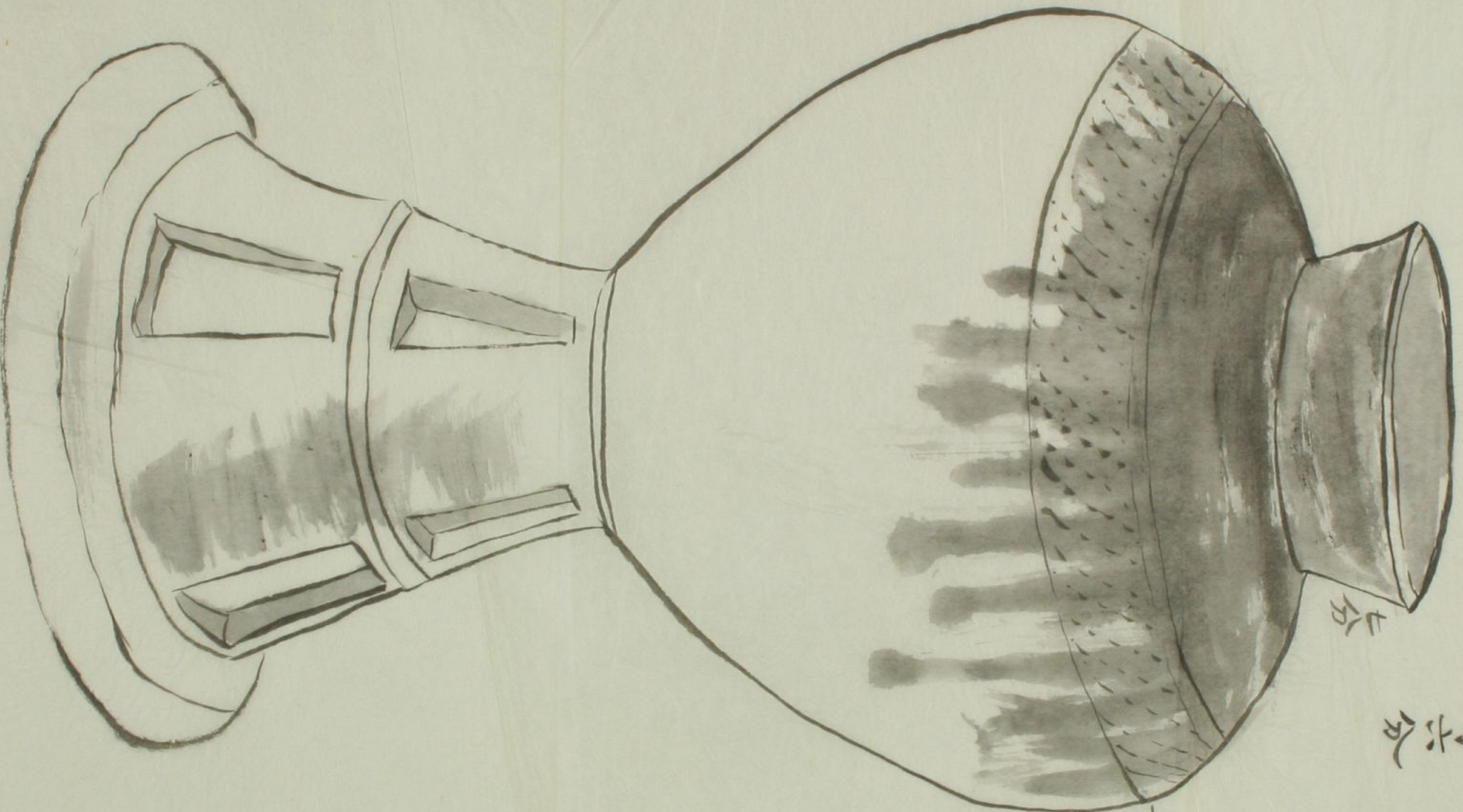
此物も喜まへしものちくちく上中とぬきしもの
 不や和もむ其の一はる美るまうこまをその
 うきまもして而のち合量かましく且つ扱け方の

東洋図説



口径
 六分

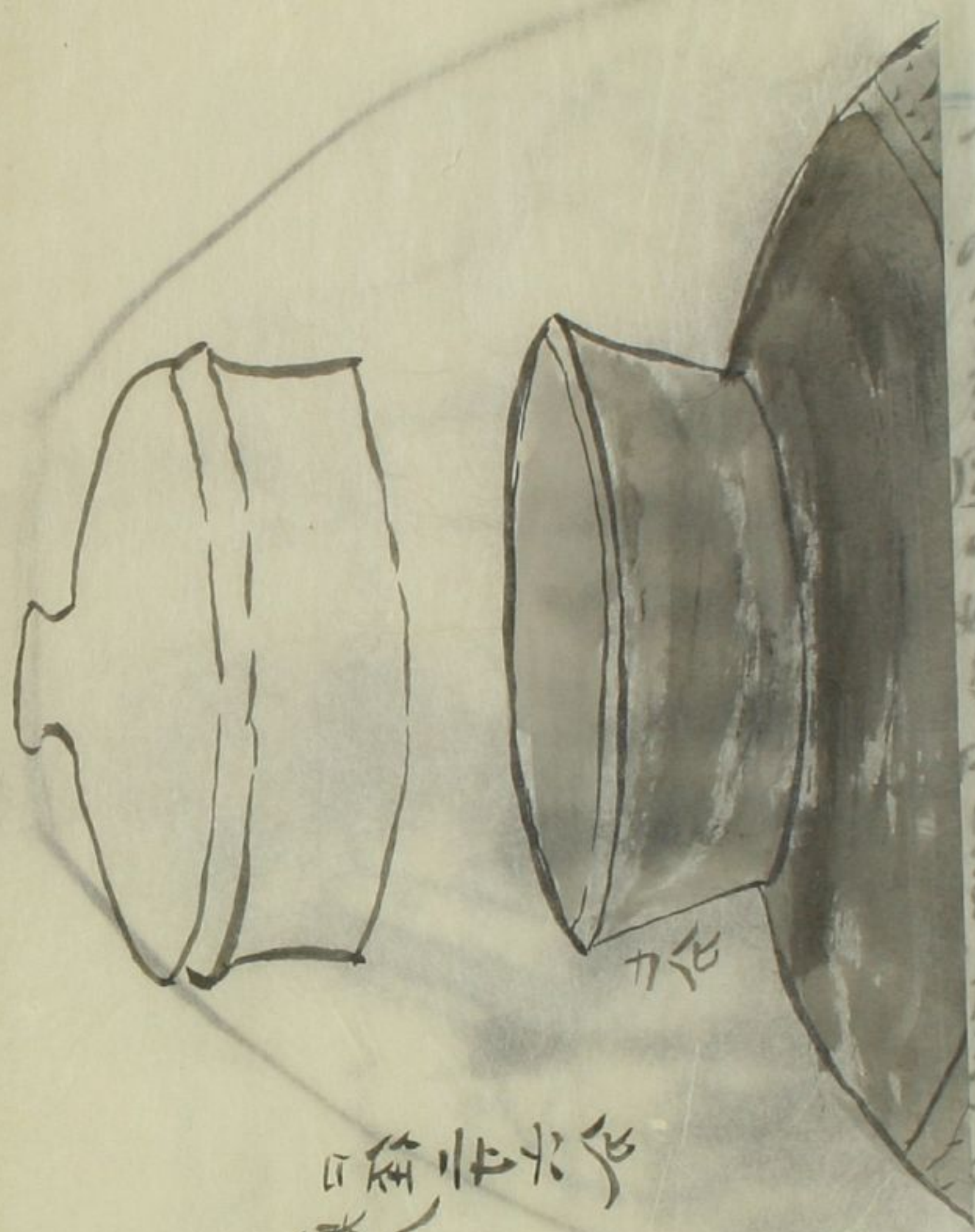
視部土器



高七寸五分
 最廣き處徑五寸八分

口径四寸七分

才二十六版の載する所のものと形状をくらべてお似たりと
 但し國語子鏡の蓋と蓋をくらべてみると余り獲るる
 蓋と鉄斤の（このも）怒らふらと出てくると感るる也

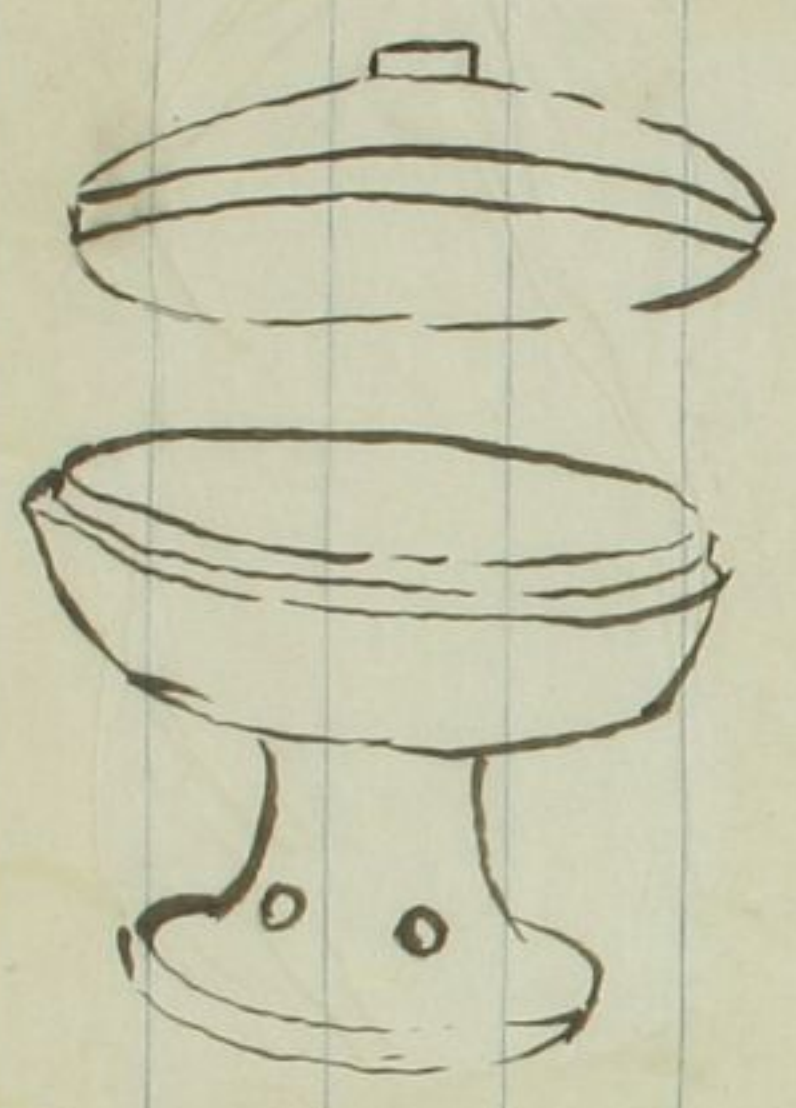


口徑廿六
 鐵斤

形如廿四

乱んたる物ゆへにさうして出来物しとの自出ると
 思ひしは井底さきこんち地がスリの吹き出し
 こころはの合里まのまゝ見つれぬあゝと保人工
 りあゝとこを造りしとらんたゝこの蓋の
 地がスリの吹出し方のぬるも人工をかゝるの如く
 又わゝゝと解をゆえをさゝるゝのさゝるゝなり

此の祭三アを前頁の物けし
 を再出す蓋の徑餘尺四寸
 九寸五分蓋の取手とも
 五寸三分廿五を徑四寸二
 分田孔四ありし事なる也



きてていざ我ら五〇〇黄檗の行りて助めさうける其
 の支那をいさすし一億元源ゆが命をさすさうさす油
 ちて料理せんか其の式を支那式とて扱ふ人際
 三人位の合卓卓子四人組が對ひ合ひ二人ついでして
 合卓卓子一組のものを卓子の上とて飯吃茶碗
 一つ十四二つ散蓮花一つ箸一膳を一人前とて飯を
 二載してあつて一組の四人を一つの六畳の卓子
 給仕のものを出しすひさう卓子のよとてさうさす
 ちて我らついでに十四のものを扱ふさう又汁物と
 大井の四人を入ん出ても散蓮花を四つ扱ひ合ひ
 此のさう酒七杯を自さう膳卓子の向とていざ

中禁食

ころ

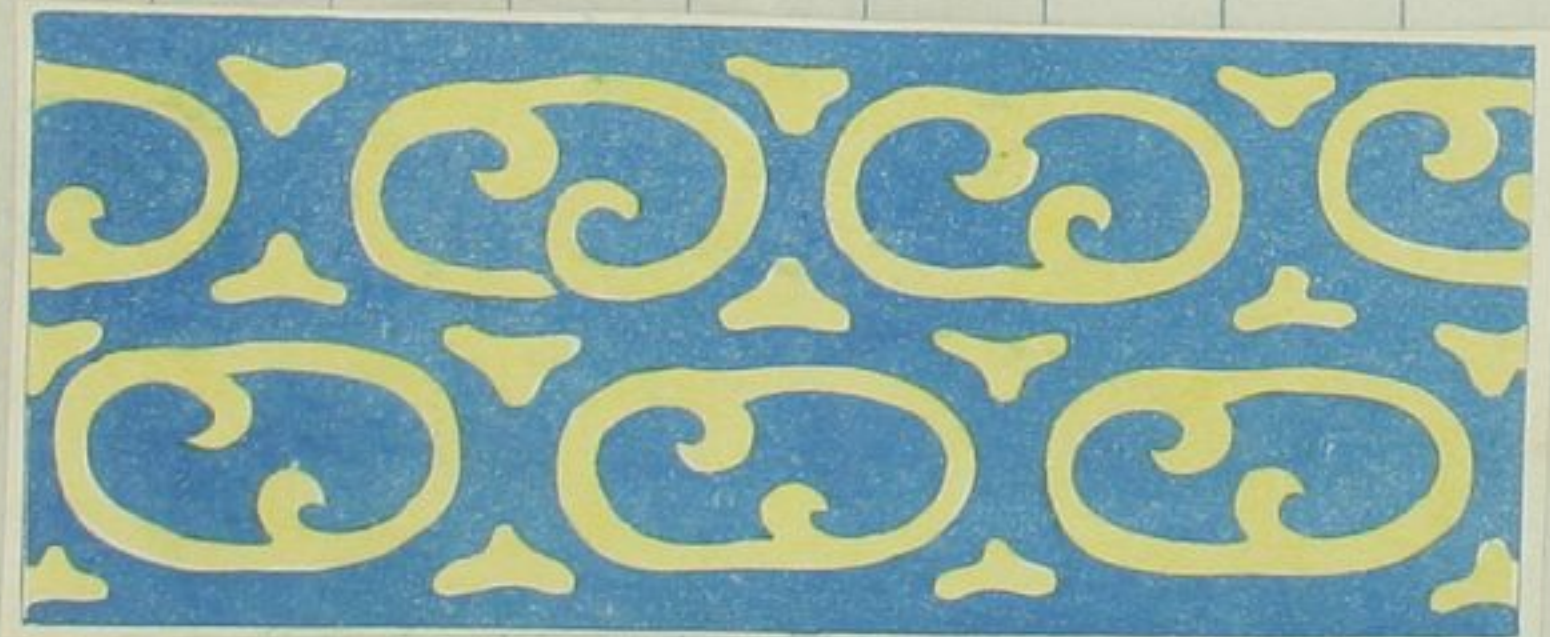
料理の扱ふ大菜七種小菜七種も大菜を径八寸位の皿
 ちてさう小菜は径六寸位の皿ちてさうちてさう下物の扱
 ちてさう異さうさうさうさう

- 唐揚 麻麩 澄し 味噌汁、汁 雲片
- 筍羹 南京 蓮 揚げ 浸れ 四角
- 生盛 香の扱

ちてさう唐揚の菓子と油揚げをさうさうさうさう
 飲茶元の仕物のきさう麻麩の麩をさうさうさう
 味つけのさうさうのさうさうのさうさうさうさうのさう
 味噌汁のさうさうの味噌汁、単汁といふさう



陸奥國上北郡洞内村字アノノ字



道園



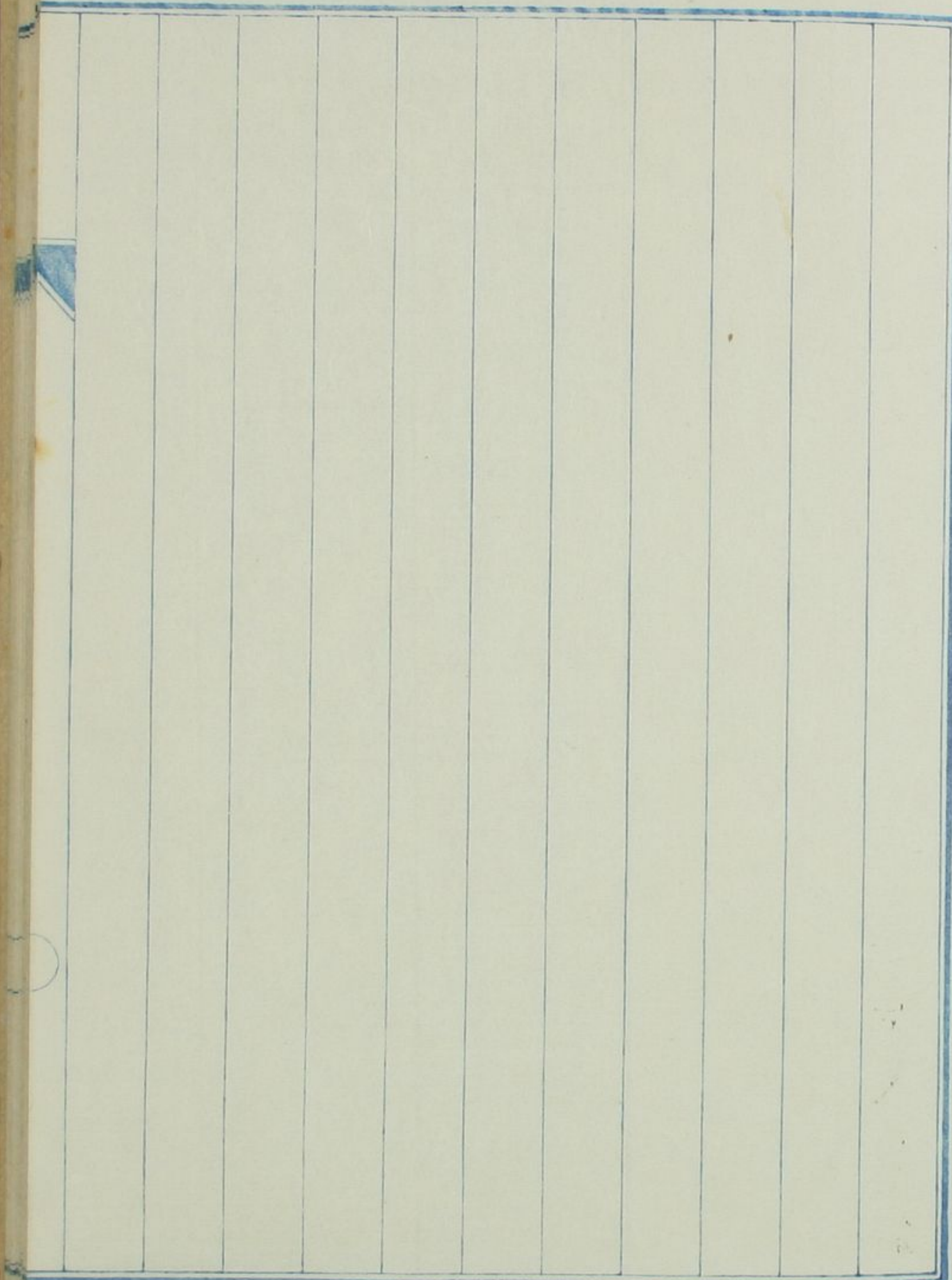
武志大森ノ掘りの



武志南玉里村
谷郡



陸奥西津
輕印簞
村ノ高岡
ヨリ松出



亀岡



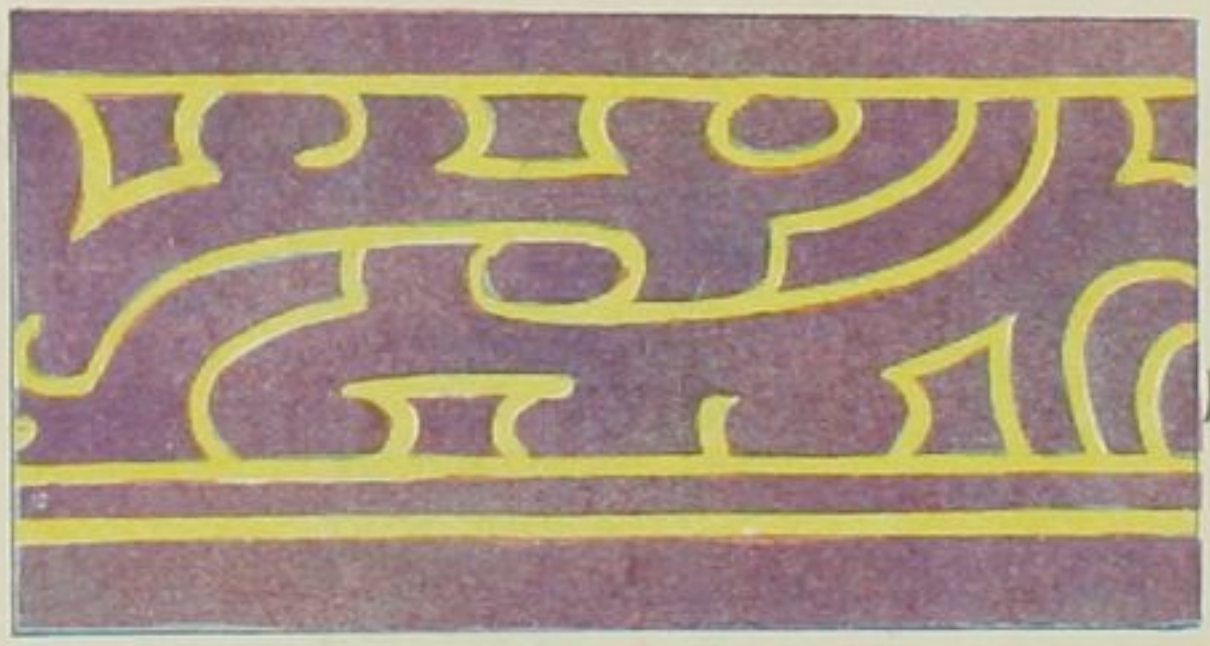
9

大森



7

里谷村



10

亀岡



8

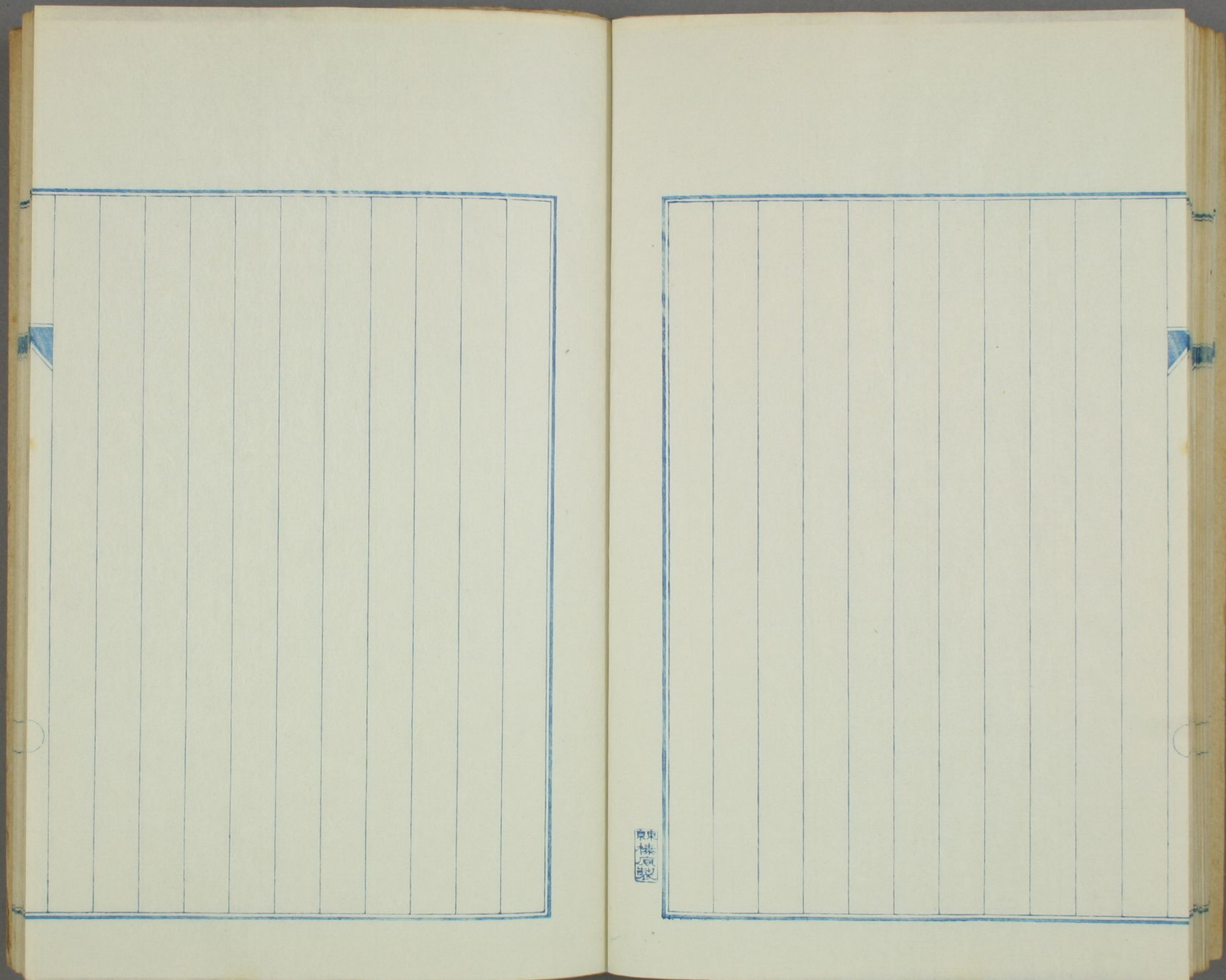
アイノ池



11

陸田氣仙村友村

陸田氣仙村友村



皇華原

○石室の代要領

坪井清子と野々宮を日本石室の代人の遺物は見
地名表と題する冊子の書誌と石室の代の後
を附する事(坪井清子の著)同書
より、要領をのちとみてお出しとるると
うす

○石室の代と石室の代と互換するべき政羅七語の
書は、石室の代と石室の代と互換するべき
の代とす

○石室の代と石室の代と互換するべき政羅七語
前、デンマーク及びスウェーデンの學者の考定とす

一七〇〇年頃の歴史を研究するに用ゐるべき
○考古学上の三時代と一石時代、青銅時代、鐵時代
の事である。青銅時代の二つの期を区別
するに二千年前前後にヘリツツト既之を伴刃を
○人類階級論の古代、ギリシヤ人の唱へし如く
ヘリツツトは墜落後の順序を五部に分ちて歌
へし

才一期ハ金時代 此時代の人民は多量に
老弱多病を蒙る事ありしと云ふ

才二期ハ銀時代 此時代の人民は快楽ありし

神代史

命短く志意をも感しざりし此人民は
うしを以て「セウス」神のあり給やせん

才三期ハ青銅時代 此時代の人民は「セウス」神の
よりこの木を以て生じし物なりしと云ふ
のよき位は青銅の武器を以て多量に
才を具を以て耕作せしと云ふ

才四期ハ英雄時代 此時代の人民は
此時代の人民は
才五期ハ鐵時代 不逞多勇の行かん苦痛多し
是ヘリツツトが自らの位あり現世を捨てて云

へんりやう

○五期の名稱中第四英作の代と云ふは、凡そ其の
よゆまを時代と云ふは、其の代と云ふは、凡そ其の
いふ青銅と鐵とをいふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
を云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
人の用ゐるやうなものを、其の代と云ふは、凡そ其の
名稱を形容の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
名稱を考へ、其の上の術法と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
力を失ひ、其の是の所、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
てんりやう

○欧羅巴の土產物と、利兵の原料と鐵と云ふ銅との

神機

別と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
昔、青銅、利兵の生るやうな代と云ふは、凡そ其の
いふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
もの、利兵、利兵の生るやうな代と云ふは、凡そ其の
凡そ其の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
利兵の行い、其の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
を其の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
代、其の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
○三時代の前後を云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
の湖の底に、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の
さんなど、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の代と云ふは、凡そ其の

遺物散布地(二)遺物倉庫地(三)貝塚(四)堅穴の
 四類を以て遺物散布地と地上遺物の存在する
 ところを以て代人民棲息の年代を以て古く
 古くない天竺或は人為の住居跡の痕跡を以て
 古く古くない遺物散布地と地上遺物の
 の扶まぬるを以て是なるを以て遺物の
 の上新土の生しを以て此土の存するは遺物の
 新古を以て一根據とすを以て貝塚を以て代
 人民の倉庫の貝殻を採るを以て堅穴を以て代
 代人民の住居を以て以て是等の中を以て
 是等遺物散布地と推するを以て

東洋製

○日本古来の代遺物中の著しきものと石斧及土器也
 石斧は形打おふ石斧 磨物も石斧 石斧石錐
 石棒等あり土器は 谷器土器土版等あり是等
 遺物の比較研究を以て代人民生活の状況を
 明かにするに又甲乙を以て文通の如きを以て表
 示す

○日本古来の代人民或は種族を以ての容ありは
 能くありとも北の多と本州の大部分を以て
 棲息してゐる一民族なりし事種々の點を以て
 遺物の一致するを以てあるを以て代説を以て之を以ては
 或は一民族の古来の代人民日本の大部分を以て

「アイス」間の口癖と「お物遣」の口癖を推測して
なる「コロボツクル」の口癖と似て似て

○コロボツクル」と「エスキモー」の一段の正中線と意味
あるものを「アムクン」の如し「男子」は「肉」を「女子
と容貌」を「女子」は「女子」を「身」を「飾り」男子
は「胸」の部開く「女子」の「服」を「胸」の部開く
と「利」の部開く「女子」の「服」を「胸」の部開く
を「用」る「女子」の「服」を「胸」の部開く
を「用」る「女子」の「服」を「胸」の部開く
を「用」る「女子」の「服」を「胸」の部開く

○コロボツクル」と「エスキモー」の口癖の正も亦注せ

「アムクン」の口癖と「お物遣」の口癖を推測して
なる「コロボツクル」の口癖と似て似て
○コロボツクル」と「エスキモー」の一段の正中線と意味
あるものを「アムクン」の如し「男子」は「肉」を「女子
と容貌」を「女子」は「女子」を「身」を「飾り」男子
は「胸」の部開く「女子」の「服」を「胸」の部開く
と「利」の部開く「女子」の「服」を「胸」の部開く
を「用」る「女子」の「服」を「胸」の部開く
を「用」る「女子」の「服」を「胸」の部開く
を「用」る「女子」の「服」を「胸」の部開く

真鍮の抽出法は、
 推し、精言の抽出法は、
 珠を煮て、
 抽出法は、

○銅鑊の所在

- 日本考古学、鑊のことは、
 大和国添下郡平城村言秋篠
 宇太郡波坂郷

東洋文庫

河内四某郡

- 一 河内四某郡寺台 (三) 奈良某氏教
- 一 伊賀四 (一) 観古集
- 一 伊賀四臺志郡下川村 (一) 古今要説
- 一 河内四卷藝郡破山村 (一) 吾國傳抄録
- 一 河内四流美郡赤戸郷 (三) 古今要説
- 一 河内四印 (一) 三代實録
- 一 河内四寶鏡郡手尾村 (一) 吾國傳抄録
- 一 河内四新田郡洞村 (一) 古今要説
- 一 河内四志野郡志多郷 (一) 扶桑略記
- 一 河内四蒲生郡鏡山打 (一) 吾國傳抄録

一	日 回 野洲郡三上山下	(三) 智恩院
一	日 回 山口 即 野洲村 <small>三上 藤原 村 大 岩 谷</small>	(十四) 滋野島金申煤
一	遠江回 佐野郡長谷村	(一) 古今要覽
一	口 回 某郡白須賀山	(三) 古今要覽
一	口 回 引佐郡氣賀村	(三) 柏原云而良
一	口 回 美智郡西原名村言釣村	(三) 吾國地物類記
一	日 回 豊田郡美和村山林	(二) 今上
一	美濃回 可兒郡久之里村	(一) 名長志信抄
一	若狭回	(二) 續日本紀
一	播磨回 宍粟郡葛庄	(二) 古今要覽
一	日 回	(一) 日本紀略

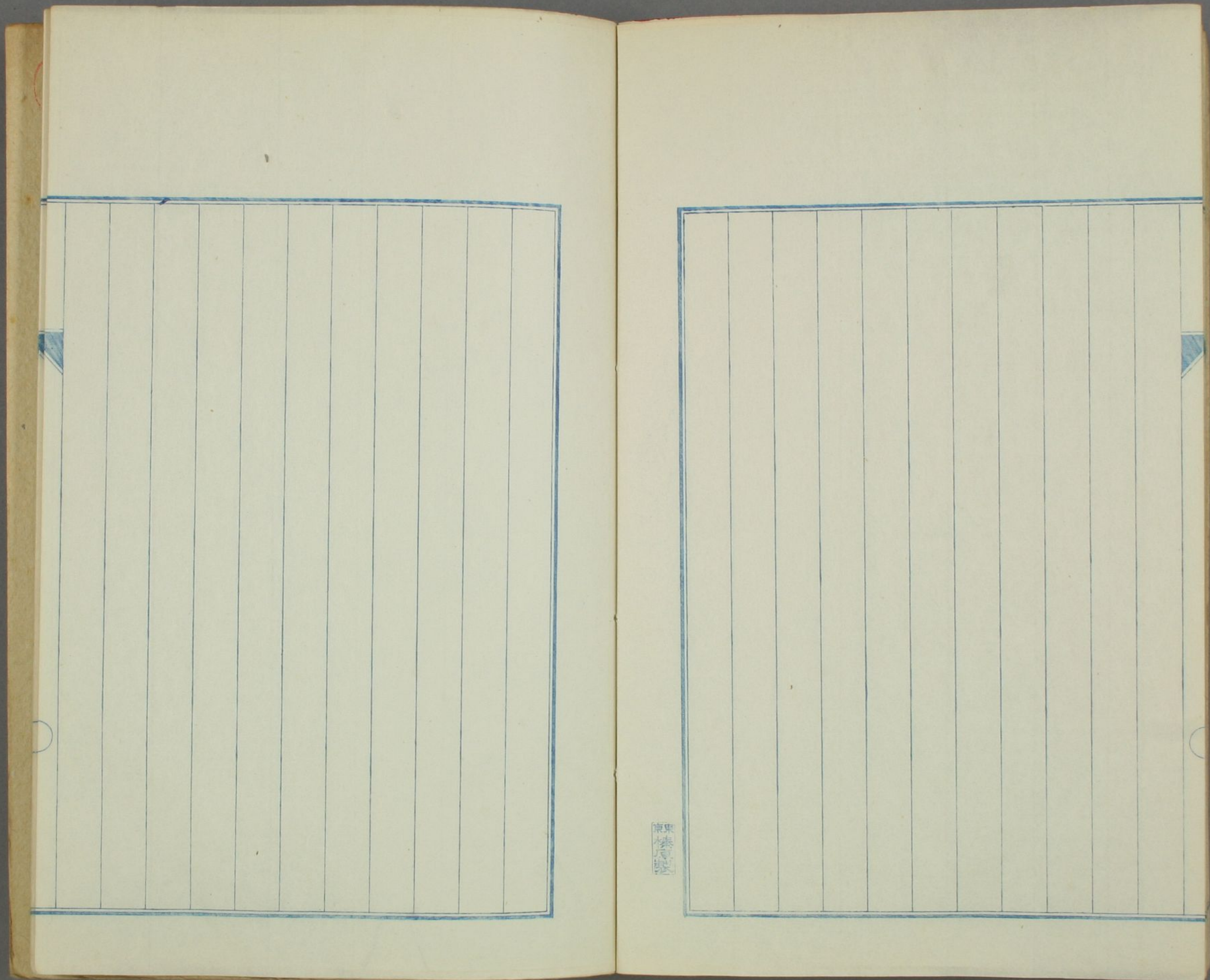
東 康 堂

一	日 回 佐用郡下本柳村	(一) 古今要覽
一	丹波回 出雲郡三河村	(一) 谷文一撰回
一	信中國 窪屋郡三須村	(二) 不取
一	潜 沼 回	(一) 関保之助氏
一	去 佐 回 香美郡藤生	(二) 爾良布神社
一	日 回 山口郡田村	(一)
一	日 回 安芸郡伊尾木村	(一)
一	日 回 去 佐 郡 森 郷	(一)

以下略す (總計五十八回)

以上之條は考古多し故に之を以て之を考ふるに於て
 七段ありて尚多し今之を以て一冊の巻とす

於ける盤等候、御太刀、御函、御花、盤等及
 い法隆寺に於ける玉を、安んずる玉出の
 厨子、真如寺の三尊来迎圓法物銘、花
 七を、板橋、と、銜立板佛画及び堂
 受を、北条康頼の障泥又と日光廟
 の康川寺の一部、描、うん、この即ち、ん
 ころ、んぶを、ゆえん、は、な、ら、の、代、を、礎、ら
 ころ、油、信、も、を、し、あ、う、し、ふ、
 本、事、見、及、秘、藏、
 ありしうみし



東洋書局

以下
6 丁
白紙



白河三十五年
四月中浣起筆

李城山人

